

青年期の世之介

鈴木 亨

一

本稿は前稿「少年期の世之介」^(注1)を継ぐものである。前稿において、『好色一代男』の構想が、主人公世之介の生涯を機械的に一年ずつに区切り、それぞれに各一章を配し、しかもその各章がすべて挿絵共三丁ずつに均等に割りふられているという、一代記としては極めて奇異な、というよりむしろ無理な方法をもって一貫していること、及びその意義などについて集中的に論じたが、結局その構想の少年期における成功が、『一代男』後半の短篇小説集の様相への変貌後にも十分に効果を及ぼして、全体として一代記の印象を確保する要因となったことも述べた。

要するに少年期の世之介は、類稀な血統と環境の中に生まれ育った異常な好色早熟児であったが、作者がリアリティに固執する限り、やはり少年としては当然の肉体条件の不備、知識の蓄積のアンバランス等は免れ得ず、それがこの期の冒険的話柄の自然な滑稽の源となっている事、既に多くの指摘がある通りである。^(注2)しかしそういう滑稽のみが狙いではない事は、そういう已むを得ざる失敗がそれなりの経験となり、その天成の資質と相まって思いもかけぬ成功に導かれる事があること^(注3)によっても知られる。これらの失敗と成功を総合して、好色スパーマン世之介は、ともかくにも荒唐無稽ではない成長過程を経て、青年期に達することを得たということが出来よう。

青年期の世之介

前稿でも触れた如く、『二代男』前半の二十八章は主人公が色道の理想像に成長するまでの過程、後半の二十六章は成長した世之介を舞台廻しとして、粹の何たるかを描くものというような見方が一般的である。^注前稿でとりあげた少年期は、その前半の又始めの部分、巻一の七章で、年立によれば七歳から十三歳までである。勿論この異常児、並の人間の少年期の経験を遥かに上廻る経験を積んで、既に軽く通常の人間の青年期・壮年期に相当する修行段階にあると見る事は出来るが、西鶴は一章一年の年立をやはり軽視する事なく、その後も慎重な展開をはかっている事が窺える。つまり十四歳以後の世之介も、やはりその年齢を基本的条件として、十分に現実的と思われる成長段階を踏んで行くのである。

少年期との差異は勿論認められる。こういう世界への見聞の拡大、研究意欲の向上は加速度的である。風俗見聞記的な記述が増加するのはその表われである。それだけに、年齢を加えれば加える程、少年期のような無邪気な失敗は許されなくなる。失敗はむしろ経験から得た知識の適用における過誤、予期せぬ条件の不備等が原因となり、単純な笑いには繋がらなくなる傾向がある。しかも失敗の結果が自他に及ぼす影響も深刻化する。そして世之介をあれ程手厚く保護していた豪華な環境も、残りなく失われるに至るのである。

以下本稿はその作者の慎重な構想の軌跡を、前稿と同様、敢て教養小説風な捉え方で分析してみようとするものである。

二

十四歳 はにふの寐道具

巻二は十四歳から始まる。まず、

其年十四の春も過、ころもあらためて着更る朔日より、袖などをふさぎて、世の人に惜しまるゝも後つきぞかし。

ということ、服装も人並に小児用のものから大人風に替ったことが記される。尤も「世の人に惜まるゝ」とあるので、特にその後姿に、愛される美少年としての魅力がまだ十分に残っている事が解る。

その世之介が、一人二人召使を供に連れて初瀬詣を志す。祈る所は勿論恋の成就である。どんな恋が進行中なのかは描かれていないが、

既に世之介、何の恋もなく、片時も過し得る男ではなさそうである。

その帰り、棕橋山の麓のかすかな草の屋のあたりで一群の美少年を見つけ、様子を尋ねてみると、この里には仁王堂とて京大坂の飛子のしのび宿があると聞き、

今宵一夜とおもひながら、色なきかたに舍りはと、いと口惜しかりけるに、爰こそ假寝の夢計よ

と、とある一軒に上り込んでしまう。恋にひまなき男ながら、それだけで毎晩相手に恵まれるわけではない。今観音に祈って来た恋とは別に、一夜限りの恋も求め得る限りは求めて止まないのである。

宿の主が、思日川染之介様・花沢浪之丞様以下を呼び出して、とにかく酒となり、金剛まじりに乱れ遊ぶ中に寐道具が出る。世之介は既に十歳の時、「袖の時雨は懸るがさいはい」で念者狂いは経験があるが、この度は同じ前髪姿ではあるが、一応袖を詰めているので、当然振袖の飛子達に対しては念者格で対する事になる。

鄙びた雰囲気ながら、蚊遣りのために焚く摺鉢のすり糠も伽羅の煙と見て近寄ると、疥癬が直ったばかりの手を打ち懸けて来る。それをも不快と思わず「嬉し悲しく」受取るのは、「さて勤めなれば」と彼等のサービス精神のけなげさを知っているからで、たとえば『男色十寸鏡』（貞享四年刊）に事細かに述べられた程度の斯道の心得・振舞などは、既に十二分に知識としては持っているからである。勿論念者として彼等に対するのは初めて、実感派の彼としては、好奇心の発動を押え難い。「すぎにし程は、いかなる里いかなる国々を廻りけるぞ」と問えば、相手もいつも相手にするむくつけき出家衆や柴刈・浦人とは全く違う、年若で優雅な世之介に、「懸るうへにつ、むべき事も何ならん」以下、安心してその悲しい転落の歴史を語って聞かせる事になる。それを聞いて「皆うそにしても偽とも思はれず」というのは面白い感想、語られた事跡は作り立てられたものとしても、その心情に真実の部分が存在することを敏感に感じ取っているのである。

世之介の質問は「さて、心にそまぬ人にあふ夜は」と、一層の機微に触れて行く。それに対して、「一代齒杖つかはざる人」にもいやとは云わぬ飛子も、それにもまさる苦難の責めには「人しらぬ泪」にくれる辛さをしみじみと語り、心底を打ち明けた油断からか、つい、

かく年月やう／＼程ふりて、くる年の四月には身自由なると思ふをたのしみ、心いはるに、然も明後日より金性の者は有卦に入まする年の七年は仕合

と、口を滑らせてしまふ。鋭敏な世之介、忽ち聞き咎めて、

金性ならば廿四の金か、我とは十違ひぞかし。

と言う。「仮初にもかゝる一座にて年せんさくは用捨あるべし」と作者は付記し、心なくも飛子の心を傷つけた世之介の無粋を咎めて、この場の落ちとしている。これは後年、『世間胸算用』（元禄五年刊）巻二ノ二「嘘も只は聞かぬ宿」の章で、来年は早十九、振袖の名残も今年ばかりと歎く女郎に対し、悪く物覚えのよい客が、

汝此の前花屋に居りし時は丸袖にて勤め、京で十九というた事大方二十年にあまる。穿鑿すれば三十九の振袖、浮世に何か名残あるべし。

と実年齢をばらす話と同趣であるが、この場合は恐らく生まれて始めて念者格で年長ぶっていた世之介、様々にしがたない飛子達の話聞いてやって同情を寄せていた世之介としては、実は十も年上の若衆を相手にしていたとは、許し難い詐欺とも受け取れたのではなからうか。知らず知らず思ひ上がったいた精神年齢が、凶らずも実年齢によって裏切られた瞬間の衝撃、興味深い落ちというべきである。

三

十五歳 髪きりても捨てられぬ世

翌年三月六日に世之介は角前髪の若者となる。半元服である。

この章は後家の話に始まる。夫の死の直後は、それこそ自害・出家もしかねまじき悲しみに、身持も堅固に過すが、何時となく心も緩み、独り身のもの淋しく、男手の欠かせぬ用もあつて、ふと心を取り乱し、思わぬ浮名を立てられたりする事が多いという。

その辺の機微を心得ている者にとっては、「後家程心にしたがふ者はなき」、「我後家を引磨る事度々なり」と手軽な遊び感覚の浮気の対象となる。うまく行けば前夫の後釜に坐る可能性もあるのだから、少々手間と時間をかけても割の合はぬ話ではない。そういうノウ・ハウと、「いくたりか心のまゝに」という成功談・自慢話を小耳に面白く聞き集めていた世之介、十五歳での後家狂いは幾ら何でも早過ぎるか、前

年の実年齢の裏切りに懲りてか、実感派の彼としては珍しくこの方面への進出は控えているらしい。しかし雨夜の品定め後に夕顔を得た光源氏を思わせるように、世之介にも機会は先方からやって来た。

四月十七日、螢見を兼ねて石山詣に出かけて、塗笠のうちには只人とも見えぬ美人を見かける。末々の女にこの寺で作られたという源氏物語のあらましを聞かせるなど、教養の程も並々ではない。それが鬪を取って、

三度まで三はうらみに存じまする

と、何事の願いかは知らねども、観音に恨み言を云うのを脇から見ると、惜しむべき黒髪が切られている。

さてこそうるはしき後家、かりに此世にあらはるゝか

と、場所が場所だけに、はっと日頃の後家情報を一気に蘇えらせる世之介、このままに見過すべきやと「思へば思はるゝ、目つきして」相手も袖すり合わせて通り過ぎる。互いに心を残す緊張の一瞬、しかし世之介はまだ自重している。動き出したのは後家の方だった。女は供の者を介するまでもなく自ら引き返して世之介に声をかける。

今の事とよ。お腰の物の柄に懸られ、我うすぎぬのあらく裂たまふこそ、さりとはにくき御しかた。まなくもとのごとくに。

弁償せよというわけである。いろいろ詫びても聞き入れず、どうしても元の絹と同じ物を返せと言うので、都へ調えに人を遣る間、松本のひそかなる茶店を借りて、共に待つ事にする。大津と京都の間、しかも目当ての商品を探して買って来ての往復であるから、その夜の間には合う筈がない。無理な言いがかりを受けながらもこれだけの策をこらす世之介を見逃すわけには行かないが、主導権はあくまでも後家が握っている。宿に着いた安心から後家は、

はづかしながら、たよるべきたよりに、我と袖を裂まいらせ候。

と告白し、深く戯れる。後家を倒すノウ・ハウを何もない、世之介は完全に可愛がられてしまったのである。なまじそんな知識があり、不相应とは思いつつも多少の野望もあつたればこそ、逆向きの強烈なエネルギーに一溜りもなかったと言えよう。後家は少くとも表向きは貞節を装うもの、浮気は已む得ざるに出でて、心疚しく行われるもの、従って迫る男は短兵急ならぬ忍耐と十分な策略をもって事を運ばねばならぬというのが、世之介の得ていた後家情報だった。人一倍上品に見えていたかの後家に、これ程荒々しい好色のエネルギーが秘めら

れていたとは、夢にも思わなかったに違いない。青年期に入ったばかりの世之介には、誠に驚異の経験であった。

その後後家は自分の家へ世之介を呼び入れて戯れを重ねる。奉公人達への遠慮のかけらもない様子、実に堂々たるものである。そのうちに妊娠、出産。さすがに世間を憚かってか、六角堂への捨子という始末となる。

夜半に捨子の声するは、母に添寝の夢の浮世

と、本文は哀れを添えるが、赤子を六角堂に置いて帰った主語は、本文では不明。西鶴自画のこの章の挿絵がその間の事情を伝えて余す所がない。

後家が座敷の中央で炬燵に当っている。炬燵の上には三毛猫、後家は胸をはだけ、両乳房を出したまま、今座敷を出ようとする世之介を見送っている。世之介は赤子を入れた竹籠を抱え、立ちながら後家の方を振り向いている。古川柳に、

今捨てる子にありつたけ乳吞ませ

というのがあるが、正にそういう情景の後、すやすや眠った赤子を連れ出す所と見える。竹籠には事前に用意された木札が差してある。捨子せざるを得ぬ事情や拾った人への願い事など記したものであろう。戸口では奴頭の下男が尻からげして提灯を持ち、今臘燭に火を点したところ、捨子に出る世之介の供をするのであろう。次の間では障子越しに女奉公人が四人、座敷の気配を窺っている。

要するに全員合意の上ではあるが、捨子を実行させられたのは世之介である。後家は類稀な美青年世之介を一目見るや有無を言わず籠絡し、徹底的に快樂のみを貪ったのである。後家をものにしたという意味では、この章は世之介の成功譚と見なされるかも知れない。しかし世之介には勝利感など露程もなかったであろう。乳房をはだけたまま竹籠の方を指さし、早く持って行けと云わぬばかりの態度には、世之介への軽侮すら見得るような気がする。世之介はこれ程の思いをしながら、二度とこの子の事を思い出す事はない。巻八最終章「床の責道具」でも、一生をふりかえって、

親はなし、子はなし、定る妻女もなし。

と云っている。敢て「子はなし」と云っている所に振り捨て難い拘わりを見る考え方もあり得るが、世之介のこの苦い敗北感を、半丁の挿絵のみに集中的に表現した西鶴の手法は、注目に価すると思う。

四

十六歳 女はおもはくの外

この年、世之介は元服して「出来業平」と評判される。いよいよ本格的に大人の仲間入りである。その頃都あたりでは、吉岡憲法という男達の風俗を学んで、俠客風の風俗・何につけても荒々しい振舞が目立った。

北野に詣で、梅をちらし、大谷に行て藤をへし折、鳥部山の煙とは五ふくつぎの吸噉筒（きせつづつ）、小者にへうたん、毛巾着、ひなびたる事にぞありける。

流行というものは恐ろしいもので、こんな野暮つたい仲間はどうしてと思う世之介が加入するのである。好奇心は彼の病、目新しい風俗で、なまじ彼の従来の価値体系の外にあつたものだけに、強い誘惑を感じたのかも知れない。尤も彼の父、夢介も、

名古屋三左・加賀の八（や）など、七つ紋のひしにくみして身は酒（注）にひたし、
という体たらくだったから、その血を引いているのかも知れない。

その仲間が岡崎で、妙寿比丘尼というのが自分の草庵で、暗宿（くらやど）という奉公人階級相手の出会い宿を営んでいる所へ集まる。その宿の様子や利用客の有様などが描写されているのは、勿論世之介の見聞の拡大を示すためである。一同は此処で「口にはいる物」即ち金で買える女を待っているのである。

そのうち昼も半時にかたぶき、気温が上がって人々は羽織を脱ぎ、重ね着も辛い程になったのに、世之介だけは暑苦しくも頭巾を脱がず、身なりを崩そうとしない。仲間が脱げと再三勸めても聞かない。遂に一人が無理に頭巾を取ると、下に現われたのは「左の鬢先かけて四寸あまり血ばしりて、正しくうたれたる疵」、こういう仲間だから、これを見ては只で済むわけではない。

いかなる者にか、かくはいたされけるぞ。男仲間にはひけとらしては何れも堪忍成難し。天狗の金兵衛・中六天の清八・花火屋の万吉にてもあれ、我々有ながら其仕返しなくては。

と騒ぎ出す。世之介は、「各別の義也。すぐならぬ恋より此仕合」と押えようとしますが治まらない。それで到頭事情を語らねばならぬ仕儀になって、一件を語り出す。事の終った後から、回想形式で語られるのは、『一代男』では此処だけである。

彼の仲間に小間物屋の源介という、丹後宮津方面へ通い商いをする者がいた。留守が長期にわたるので、世之介はその間の世話を頼まれ時々見舞って火の用心など指図するうち、この女房の優美に耐えかね、道ならぬ口説き文を千束も送ったが、一向に反応がない。更に迫れば「二人の子もあるのにさもしいお志」と恥かしめ、遂に俠客風の奥の手、「したがひ給はずは、劍の山を目の前」を出すと、女房何と思つたか、急に態度を改め、

さ程におぼし召とは聊存せず。さもあらば、今宵廿七日、月もなき夜こそ人もしらまじ。しのばせられよ。

と承知の約束。喜んで出向くと、内よりくぐり戸を明けて「是へ御入候へ」と迎えると見せて、手ごろの割木で眉間を強打、

私、両夫にま見え候べきか。

と戸をさし固めてしまう。その時の傷がこれというわけである。女に眉間を割られたとあつては、俠客たる者、世間に顔向けが出来ぬ。と云つて復讐する大義名分は更々ない。道義的に不埒なのは、弁解の余地なく世之介の方なのであるから。

先章に続いて世之介が女に完敗した話である。しかしこの二章は実に見事な対照をなしている。一方は好色の後家、一方は貞節な人妻。後家は崩れ易いが、立前は貞節の筈だから、男の方が積極的に動かなければという常識が、世之介が虚を突かれる因となった。人妻の貞節はこれ亦当然であるが、比丘尼経営の暗宿、その利用客の秘かなる逸樂の見聞が、この場合、世之介に裏側の（立前に対する本音の）展開を期待せしめたとしても無理はない。

特に女は親友の妻であり、留守の用心の上では多少自分に恩義も感じている筈である。その夫は長期の留守、その淋しさは後家程ではないにしても、同様の危さは持っている筈、何よりも常人を遙かに越えた「出来業平」と称される自分の容姿、それに練磨のテクニックをもつてすれば、如何なる女も落ちないとは信じられない。

それが攻めて見ると意外に頑強だった。最後の押しが俠客流脅迫である。前章の後家の強引な求愛が、世之介を甘く見ての言いがかりに始まる事は、見て来た通りである。ひよつとすると、その反省が世之介を男達仲間だに導いたのかも知れぬ。若しあの時、世之介が糸鬚・上髭・

長脇差姿であれば、如何に大胆な後家でもあそこまでの振舞には出られなかったであろう。

今度は立場が逆転している。「剣の山を目の前」はこちらの専用、女は頼りとする夫は不在、二人の子を抱えて全く弱い立場にある。それで一旦は成功したかに見えた。とりあえず刀の脅迫を除去するためだけの作戦とは、力と自らの美貌を過信する世之介に見破れるわけはなかった。それにしてもその相手が、こちらが暴力を捨てた途端に、思いもかけぬ暴力で、無法にとどめを刺すとは、しかもこちらが何ら文句を付け得ない形で、事態を収束してしまうとは、何という見事な懸引きであろう。

世に又かゝる女もあるぞかし。

という結びの一文は、決して単にこの人妻の貞操堅固を讃えただけのものではない。刀の脅迫の下で、只一人、先の先まで事の成行きを謬りなく見定めて、過不足なき処理法を一瞬のうちに計画、大胆に実行した恐るべき知力と意志力、「かゝる女」とはそういう女を指すのである。ここだけ結果を先行させて、回想法で記述したのは、そういう女の瞬時の企画の優秀さを強く印象づけるためであった。

世之介の好色修行、女に連敗して俄かに前途多難の様相である。大人になれば、出会う敵もそれだけ強大になり、しかも全力を挙げて立ち向かって来る。単なる色道修行では間に合わない、人間性全体の練磨が必要な勝負の世界に投げ出されたという事でもあろうか。

五

十七歳 誓紙のうるし判

大人になった世之介は、当然社会の一員としての活動も求められる。「商売の道をしらでは」と、奈良曝さらしを仕入れて北陸へ売りに行く実習に狩り出される事になる。

三条通の間屋に着いて、商品を仕入れるうち、若草山、飛火野を眺め、奈良の町を散策して木辻町に至り、七左衛門の揚屋に上り込んで遊ぶ。例によってこの廓の風俗描写が豊かに展開される。何人かの女郎を呼んで帰した後、近江という女郎が来たのを見れば、確か大坂で玉の井という名で出ていた女だと世之介は気が付く。流れの身の不思議さ、思いがけない所での再会を喜び、最初から互いに打ち解けて、

夜の更けるまで語り合うのであった。

万事手軽な遊び所で、気の詰まる格式もない代り、床入りとなつても六疊敷を幾間にも仕切つた割床、「一夜の事なれば足のさはるも互に御免」と挨拶する相床の客や亭主の会話を聞くとまなしに聞いている。

伊賀上野の米屋は、明日国許へ帰るといふので、大崎という馴染の遊女からいろいろ土産を貰い、亭主に、
忽じて此中のしなし、物をもつかはず。今といふ今すいになつたと存る。

と云うと、亭主も面白い人で、

まだたらぬ所があり。まことのすいは爰へまいらず、内にて小判をよふで居ります。

と応じ、一座「是は尤も」と同ずる所など、誠に気楽な雰囲氣に、世之介も存分に氣をのばし、世の中にはかかる遊興もあるものと深く感じ入つた事であつた。

お蔭で近江との仲も深まり、重ねて何度か会つ中、誓紙に奈良曝の改めに用いる漆判を押して、末長い愛を誓ひ合うに至る。

裕福でない人々が集まる所だけに、万事金がかからぬ様に工夫され、遊ぶ人々も儉約に心がけるのであろう。しかしそれが或るバランスを保てば、「粹」の名に値する互いの思いやりを確保し、さもしい世智辛さとは無縁の、のびやかな雰囲氣をいとも手軽に作り上げてしまふ。誠の粹は内で小判を読んでいるといふのは勿論冗談、しかしそれに近い、生活は生活で安定を守り、遊びは遊びで十分に楽しいという境地を、あるバランスに求める事は可能なのかも知れない。勿論それもその場を形成するすべての人の心次第であらう。そんな事を世之介は感じた筈である。

近江がどれ程良い女郎だったというわけでもなからう。しかし皆がこの思いがけぬバランスに乗り、慾を程々に抑制して互いに楽しみを求めた時、すべてはそれなりに輝くのである。

青年期に入つて世之介の色道修行は、努力の割に報われる事の少い、随分苛酷なものであつたと見る事が出来る。その中でこの木辻町での経験は、単なる心のオアシスたり得たばかりでなく、苛酷な敗北経験にまさるとも劣らぬ、貴重な教訓をもたらしたのではないかと考へる。

十八歳 旅のでき心

大富豪の一人息子としての世之介は、やがてこの大店の店主たるべく教育されなければならない。この度は江戸大伝馬町の絹綿の支店へ「万勘定聞くべし」(年末決算の監査をして来い)という、今までにない重要用務を帯びて、江戸下りする事になる。

十二月九日京都発。二日目の泊りは鈴鹿の坂の下。大竹屋とて「所にならびなき大座敷」に着いたが、早速このあたりでは著名な遊女、鹿・山吹・みつの三人を呼び、夜通しの大騒ぎ。そんな調子で泊りを重ね、駿河の江尻まで来て、運命の人、若狭・若松に遭う。

連ぶしに歌説経を語る二人であるが、何と言っても稀に見る美貌、旅人達が会おうと思っても、五日七日も逗留して待つか、それでも駄目なら仮病を使ってでも滞在を延期して、やっと会う事が叶うという全盛である。それを聞くより世之介は、

吾妻の空物すごく、はやいかぬ氣に成、

此処ぞ住むべき所と定めて、江戸行はあつさり断念、かの姉妹にすっかり馴れ親しんで、

左のかたにわかさ、右のかたにわか松と召れさむらうぞや。(注6)今中納言平さま。

と、名に立つ頃には、抱え主から身請けも済ませ、都へ連れ帰ろうと道を逆に辿る。その暮は二川の宿で旅寝、二人から此処で遊女勤めをしていた頃の話面白おかしく聞いた。更に旅を続けたが、遂に旅費が尽き、女の着物まで売りながら三河の芋川まで来て、人の住み荒した笹葺の家を修復し、所の名物とて平鱈鮓ひらごを作り、かつがつの生活。それでも二人は火を焚く片手に三味線を放さず、往來の客を止める一助としていたが、次第に衰え、どうにも生活が立たなくなつて、世之介はこの二人を置き去りにして出奔、姉妹は仕方なく髪を剃つて道心者になつてしまふ。

何ともひどい話である。江尻に在ればあれ程の全盛を続けていた二人、世之介の無責任な身請けによつて生活の基盤を失い、食うや食わぬの放浪の末、瘦せ衰えての尼道心。世之介の魅力が他の道中客に較べて格段に立ち勝っていたのは確かであろう。彼女等が、他の道中の

女郎に較べて、又格段に勝れていた事も認めて良い。しかし、世之介程の色道のベテランが、一身を放棄してまで狂う相手であつたらうか。二人一組というのも何か気になる。ペアで暮しを立てていた姉妹であるから、ペアで面倒を見ようと言うのであろうか。

此処には前章のあの夢のようなバランスの余韻が漂っているような気がしてならない。田舎の連れぶしの説経語り、声も三味線も顔も好い。それを手許に置くだけで、人生何不足があると言うのだ。江戸支店での年末総決算の監査、洋々たる未来、大勢の手代達の羨望のまなざし。しかし考えてみれば、世之介はどうもそういう本業には向いている性格とは思えない。前章の奈良での商品仕入れの際でも、用務は手代の助けを借りてそこそこに済ませたのだらうが、あとは奈良見物、特に木辻町の遊興に力を尽したのだった。例の奈良曝の漆印を誓紙に捺したというのは、象徴的な行為ではなからうか。

第一、世之介は生まれてこの方、一度も金に困っていないのである。九歳の時、死一倍で三百目の借金をしているが、前稿でも述べたように金に困ってではない。遊興費の調達法の特異な一つとして、実験してみたに過ぎない。ということは、金自身に殆ど魅力を感じていなかったという事でもある。金のために、金を相手に働く事などに、どうして意義が認められようか。勿論そんな事が思えるのは、無限に近い金に恵まれているからだだが、世之介に通常の金銭感覚を求めるのは、そもそも無理なのである。

それがこの旅で、始めて金に窮したわけである。勿論旅費は十二分に支給されていた。毎晩の酒宴遊興も、日程を少々延長しても、それで不足を生じる額ではなかった筈である。しかしそれも予定通り江戸に着けばの話である。又何かの事故で到着が遅れたとか、途中で病気になるったとかすれば、一報を入れるだけで如何程の救援でも受けられた事であらう。しかし問題は身請けであつた。しかも二人分。これでは救援を申し込むわけには行かぬ。それでも江戸へ目をつぶってでも行けば、事態は違つていたであらう。しかし江戸へは行かぬ気、それは若狭・若松との気楽にバランスのとれた生活への憧れのためではなかつたか。

『一代男』という紛れもないフィクションのために、このように現実的な考察を続けることには、疑問を抱かれる向きもあろう。しかし此処は一年一章の『一代男』の重要な転回点なのであり、西鶴もそれなりの仕込みの上に立つて展開をはかっていると思う。それ故に前章との繋がり重要なのである。世之介は始めからこういう事態を予測していたとは思えない。金に窮する経験を全然していないからである。救援すら断たれる、むしろ自ら断つ事態が来ようとはどうして予測出来たであらう。

若狭・若松との別れは、愛が尽きたためではない。二年後、山伏の弟子となって峯入りの途中、岡崎の長橋を渡る事になるが、その時も、すぎし年若狭・わか松と住ける昔しをおもひ出、桧笠をかたぶけ、

と、心の痛みにその方を見るさえ忍びぬ思いをしている。こんなにまで過去の愛を引きずっている例は『一代男』には他にない。それにも関わらず二人を無慚にも置き去りにせざるを得なかった。思いがけない経済的困窮のためである。彼にはその愛を持続しながら、それを打開する方法がどうしても見つからなかった。その方は全く未経験であったからである。

大商店主たるべき訓練が始まった途端に、こういう悲痛な苦難に遭遇したのは何とも皮肉な事である。奈良木辻町以来の気楽な遊びの樂しさが、豊か過ぎる東海道独り旅の気俣の中に持ち越され、世之介を油断させていたという事もあろう。思えばこの気楽さは、

忽じて此中のしなし、物をもつかはず。おそらく今といふ今すいになつたと存る。

まだたらぬ所あり。まことのすいは爰へまいらず、内にて小判をよふで居まする。

という彼の時の対話が示す、厳しい抑制の上に成立していたのだった。その時は「かゝる所にもすれものありや」と、余所ながら聞いて面白く思っただけであったが、その中にこれ程深刻な教訓が秘められていたとは、世之介、今という今痛切に肝に銘じた筈である。

此処で世之介は変わる。経済的支持のない愛は長続きさせようがない事を悟ったようである。だから深入りしないで、次々に求めては捨て、その代り出来るだけ多数を相手にしようとする。自然その対象は広がり、その代りその質的吟味は疎かになる。個々の価値評価より、対象からそれぞれ如何なる形のものにせよ最大の価値を引き出してみようとするようである。勿論同時にそれは世之介自身に向けられる努力でもある。彼はどのような境遇でも絶望する事なく、その境遇で為し得る最大の好色を求めてやまない。明らかに意識的にそういう人間になつたのである。

敢て若狭・若松を運命の人という所以である。

七

十九歳 出家にならねばならず

あかねさす日のうつりを見て、夜があけたと思ひ、燭台の光にけふも暮たとしりぬ。昼夜のわかちも恋に其身をやつし、浅間敷姿と成て江戸に行ば、

飄然出奔後の世之介は、何処でどう過したのか、それでも昼夜のわかちなく恋に身をやつしながら、ぼろ／＼の状態で結局江戸に辿り着いた。重要な責務を放棄して姿を消したのだから、今更父の許へは帰れない。江戸店なら手代達ばかり、そう邪慳にはしないだろう。それも父に通報されて、その沙汰次第でどうなるかは解らないが、それまでの間は兎に角一息つける。恐らくそのように考えての事であろう。江戸では喜んで迎えてくれた。

御行がたのしれざりしを、御ふくる様よりの御歎き、いかばかり

と、人気者の母親の心痛への同情が思わぬ力となって、この不埒極まる若旦那を皆で労わる。それを良い事に、例の変身を遂げた世之介は、深川の八幡・築地・本庄の三つ目橋筋・目黒の茶屋を捜し、品川の連飛・白山・さん崎の得しれぬもの、浅草橋の内にてうなづく事迄を合点して、後は物縫の小宿・板橋のたはれ女も見のこさず、次第にはしばの道すぢをとほる、こそおそろし。

と、留る所を知らぬ発展ぶり。これが京に聞えぬ筈がない。父親から荒けなく勤当の旨通達されて来る。しかし先にどんな状態で江戸へ辿り着いたかを知っている重手代は、このまゝ、追い出しては命が持たぬと判断、さる長老を頼んで出家させる世話をした。それによって衣食住の最少限の保障をすると共に、それで身持が改まれば勤当が許される事も期待出来るという親切である。

しかし変身後の世之介にどうしてそんな殊勝な生き方が可能であろうか。三日と続かず、珠数の珊瑚珠を売って何がなと思ふ折節、供を連れた十五・六の美少年を見かけ、呼び止めて香具売というその方面の売り物と知り、様々の知識を仕入れて、やがて葛西の長八・池の端の万吉・黒門の清蔵という三人に日夜乱れて、忽ち髪は散切、衣は雑巾、台所には白鴈の胴がら、鰯汁の跡といういたらく。釈迦と同じ

十九歳の出家も惨胆たる結果に終る。

人の親切も顧みず、まことに身勝手な自滅行為である。しかし彼は生まれついでの色情狂ではない。親に背いたのは十八歳の江戸下りの時が初めて、それまでは親の指示のまゝに手習いも商いの見習いもしているのである。やはり若狭・若松との痛恨の別れが響いているとか考えられない。江戸で一息入れたとは言え、江戸入りまでの惨胆たる放浪を忘れたとも思えない。とすればこの行為、当然命に関わる事も予見出来ない筈はない。若狭・若松のその後の消息、生死の程も知らぬ彼の心の空白。それを埋めるものは念仏でも阿弥陀経でもない。命を賭けた日夜の乱れ遊び、それも心底惚れての事ではない。それらの相手がそれぞれに特定の念友を持ち、勤めもその許可を得ての事である事は百も承知、遊ぶ事自体が自滅に繋がっているから、その緊張感が深い心の空白を埋め得るのではないか。

狂したのではない。自暴自棄でもない。たゞ命を磨り減らして間断なく求め続ける。そして恐らくその果てには、何も期待し得るものはないのだ。

燃杭に火とはこの人の昔にかへる。

と、この章は結ばれている。表面は確かに元の好色スーパーマンに戻ったとも見えよう。しかし彼がこういう心境で乱れ遊んだのは、過去には一度もなかった事である。

八

二十歳 うら屋も住み所

勿論こういう過度の緊張がそう長く維持出来るものではない。

配所の月久離きられずして二人みる物かとは、うつくしき女の書きつるも此身になりて、それはそうよと思はるゝ。

『徒然草』第五段をもじった文言で始まるこの章の冒頭には、そういう世之介の気の弱りが見えている。「なを精進腹のどこやら物淋しく」ともあって、肉体的にも頑張りが利かなくなっているらしい。「終にはきゆる命、爰はと庵を捨て」と、遂に限界を感じた彼は、江戸を去る

決心をする。家へは帰れずとも、せめてはその近く、上方へ移り住みたかったらしい。

乱れ遊びながらもこれまで命が続いて来たのは、衣の威光がまだあったか、江戸店のひそかな支援があったかであろうが、もうそれらも限界に来ていたのであろう。とすれば、この旅もまず旅費の工面が一苦勞である。幸い最上山伏の大楽院という先達の弟子にして貰うことが出来、その一行と共に峯入りする事になる。岡崎の長橋を渡って、若狭・若松を思い出し、桧笠を傾けたのはその途中である。旅の日数を重ねて無事峯入りを果たし、後鬼前鬼の峯恐しく、少しは宗教心も出て今までの懺悔物語もしたが、それが目的ではないから、下向道で一行に別れ、大坂入り。藤の棚で家を借りて、鯨の髭で耳搔きなど作る細工で、はかないその日暮しを始める。

兎に角食えなければ何事も始まらぬと、彼としては堅実な生活設計から始めている事が解る。それも前章の、出家の初めに貰った珠数の珊瑚珠を売るといふような、その場限りの金策ではない。一年一章の構図を守る西鶴が、一年毎の発展を着実に仕組んでいる事が、こういう所からも察せられる。世之介は十分に経験から学んで成長しているのである。

はかないながら生活の基盤が出来ると、直ぐにその基盤で可能な範囲の好色の対象を精力的に探索し、その悉くを征服して行く。小谷・札の辻のくら者、月懸りの手かけ者、出合女、「残らず探してしらぬといふ事もなく」名の立つは合点、忽ち名代男となる。勿論その種の女の裏の裏の行状まで知悉するに至る。その風俗描写の部分は、一般読者にはこの方面の興味深いガイド・ブックの役を果たすであろうが、作品の趣旨としては世之介の見聞と知識内容を披露する部分である事、他の同様の部分と変らない。その種の記事、特に下層階級のそれらについての記事が、この青年期に集中している事は、世之介の好色修行の経過から見ても、当然の結果なのである。

さて藤の棚の一角は細民の棲む所、「とをしの底入、引白の目きり、鉢ひらき、放下師」などが細路次長屋にひしめき合い、世渡る品は様々でも煙も絶えがち、そういう人々の生活を日夜見ていけば、「おもしろさもすこしはやみぬべし」、つまり如何な世之介でも、我が身の成り行く果てを見せつけられる想いがして、色事に現をぬかしてばかりは居られないだろうというのである。

前章の、求めて破滅に近付いた世之介は早くも消えている。手は早く、精力的に量をこなすが、生活を無視する事はもはやない。

大溝の日影に物干棹を掛けて、飛紗綾の脚布や糠袋を干しているのは、場所柄だけにいずれ只者ではないが、兼好が見たら命盗人と言いかねない老婆の娘としては、なかなかの美女がいる。世之介はその持ち物など仔細に観察して、「昔しはかくはあらざる者のはて成べしと、

いな所に氣を付て」、小栗判官の当代版、強引に申し込んで入り髻となる。

世之介は勘当の身ながらこうして妻を得たのである。ひたすら好色修行に明け暮れた筈の世之介、妻を設ける事はその邪魔にこそなれ、何の得にもならないのではないか。それも後の（巻五ノ一「後には様つけて呼」の吉野太夫を身請しての結婚のようなものなら、豪華な好色の栄光に輝いていると言えよう。この場合は昔は兎も角、現在は零落して僅かに幾つかの持ち物に昔を偲ばせるだけ、作者ならずとも「いな所に氣を付て」と言わざるを得ぬ。結婚しなくても十分に物になる女である。そこへ望まれもしないのに入髻する、どういふつもりなのであろう。

世之介は生活の安定を求めたのである。結婚によって、老母を含めて三人の生活の責任が懸かって来る。しかも妻たる人に今までの仕事を続けさせるわけには行かないだろう。それなら経済的には明らかにマイナスである。しかしそれには代えられない何か、家庭生活という安定感をこそ、世之介は得たかったのではなからうか。

若狭・若松との別離以来、世之介は緊迫した、むしろ乱暴など言いたい好色生活に溺れ込み、その疲労困憊から立ち直ってさ、やかながら生活の基盤を造り上げた。それは生まれて始めて彼自身が独力で作り上げたものであった。その上に立てば、あの木辻町の、誓紙に漆判を捺した和やかな愛の生活が得られるのではないか。幸い、この貧民街の中では、唯一、昔一度はそういう心豊かな生活をしていたらしい女を見つける事が出来た。この女となら、そういう生活が実現出来るかも知れない。

少年期から余りにも激しい好色修行の日々に揉まれ続けて来た世之介が、今二十歳に至って、生まれも付かぬ貧民街で昂然と自ら持し、こういう家庭的安定を求めたとしても、許されるべき事ではなからうか。

これで『好色一代男』は巻二を了える。巻一の巻末と同様、作者は此処でも明瞭な区切りを置いている事が感じられる。

注

- 1 大手前女子大学論集 第29号（平成7年12月）
- 2 森山重雄・「西鶴―人間喜劇」『封建庶民文学の研究』所収他。

青年期の世之介

- 3 卷一・十一歳『尋ねてきく程ちぎり』十三歳「別れは当座はらひ」
- 4 暉峻康隆・『好色二代男の世界(1)』NHKブックス『好色物の世界』所収。
- 5 卷一ノ一「けした所が恋のはじまり」
- 6 謡曲「松風」の文言のパロディ
- 7 卷一ノ三「人には見せぬところ」